
【習作集】徒然日記と隅っこの落書き

縄口圭心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【習作集】徒然日記と隅っこの落書き

【Nコード】

N1194M

【作者名】

縄口圭心

【あらすじ】

ミクシイの日記を私小説風に書こうと思い立ち、徒然とした出来事を気ままに載せます。

文章力アップのため以外の何ものでもない！藁

風船

今の俺って奴は、七五三の頃に根っ子になる言葉を父親から授けてもらって、芽が出て、茎を伸ばして、葉を茂らせ、幹になって、木漏れ日を作って出来上がっているんだろう。

漠然とふらつきながら生きている人生で、確実に迫っている先の社会、不安に追いついてられて、ふと、過去を見返してみて思ったことだ。

その言葉が出た詳しい場所は覚えていない。何しろ七歳の頃なんて思い出を作っても次々忘れるもんだから、確実に経験してるものとして見るには写真でもない結構おぼろげになっているものだったりするのだ。初めて自我を持った瞬間を覚えてるくせに、何だか理不尽である。

とにかく、俺が七歳の時、都会のどっかの神社だったはずだ。朱色が目に焼きついたのを覚えている。

当時、俺は七五三が嫌いだった。

何で？って、親に無理矢理パンチパーマかけられるわ、窮屈なスーツみたいな硬い服を着せられるわ、意味のわからない呪文を神主にかけられながら大幣とか言う紙束をやたらめったに付けた棒を振るわれるのだから、幼心に恐怖や不快感を覚えても何の不思議もない。

言っても人生に三回しかない行事。その内一回、三歳の時点の記憶は綺麗に消えているため、当人にとっては人生に二回しかないイ

ベントだ。つまり俺は、五歳の時に体験した一連の流れで嫌になったということになる。全く、両親はたったの一回で何てことをしてくれたんだ。と、今なら笑い話にもできそうだ。

そんな感じで、七五三の作業を終えて帰宅しようかと神社の境内に差し掛かったところ。

よく聞いた、しかし、実際に聞くのは初めての鳴き声が聞こえる。

ウグイスの、ホーホケキョ。

ウグイスは、本当に「ホー…ホケキョっ！」と鳴くんだ。などの子供らしい感想を抱いたところで、見送り途中の神主が物珍しそうに顎へ手を当てていた。

「こんな都会に、珍しいですね。滅多に拝めませんよ」

後の体験だが、俺はこの一回を除いて山以外の場所でウグイスの声を聞いたことが無い。山で聞いたのも三回程度しかない。それだけレアな体験であるということなのだ。

当時の俺は別段感動に打ちひしがれることもなく、ただただよく通るキレのある一声に耳を澄ましていた。

「お前は選ばれた人間なんだ」

これが、父親の言葉だった。

都会のと真ん中で、しかも俺の最後の七五三のタイミングで、山

にいるはずのウグイスが飛んで来た。それを天命と言わずして何と称する。それが父の主張だ。

ちなみに父は三国志などの中国の伝説や思想が如実に現れた本に溺れている節がある。この発現も大真面目だった可能性が高い。

ただの偶然だ。と、俺は幼いながら大人びた考え方をしていた。

ただ、父という大きな存在に、現在でも何かにつけて競い続けている相手、好敵手にそう言われたことが妙に誇らしくて、ことある毎にその言葉を思い出しては悦に浸っていた時期がしばらく続いていた。

そんな悦も言葉も忘れて生きて、

今頃になって、思い出した。

こんな昔の根っ子にすがってしまうほど、今の俺は幹がボロボロになるまで追い詰められて、友人に恵まれていながらある面では絶望的に孤独で、葉っぱが太陽を欲する度に逃げられている。消極的な自己完結であるのはわかってはいるのだが、そんなトラジックな思いに駆り立てられてしまうのだ。

果たして、俺にはこの世を自分の好きなように生きる才能が無いのだろうか。

才能：選ばれた者の証。才能の否定はきつと、父親の言葉の否定で、俺自身の根幹の否定で、俺自身の歴史の否定なんだろう。

「お前は選ばれた人間なんだ」という父親への裏切りのような気が

して、法定基準を満たす大人にまで育て上げてくれた両親、家族へ最悪な仕打ちをしてしまっているのでは…という自責の念に駆られてしまう。

ならば、才能を育てれば良い。才能を育てるだけの人々と関わり続けられ良い。

口で言うのは簡単だった。

だけど、人との接点を増やす度に、むしろ自分の空虚が広がっていく感覚ばかりだけが募る。丁度、息を吹けば風船はそれだけ大きくなってくれるが、中身には何も無いまま、肥え太るだけのように

増やしたただけじゃ駄目だ。もっと濃密に、もっと親密に、もっと精密に。風船に水を注ぐんだ。

それが怖い。

風船は水を入れただけ、割れ易くなるから。

これ以上膨らませるのも怖い。

どこで割れるかもわからない。限界のわからない風船だから。

でもこれ以上、俺に残された手段ってあるのか？これ以外にあるなら言ってみろ、俺よ。

答えなど持ち合わせていないことなど、分かりきっている。ただ、答えられない自分が許せないだけなんだ。許さなければ、許しても

らえるまで頑張ろうと思えるからだ。

そんな都合の良い解釈で、軸が定まらない日が一週間ほど。

梅雨時で蒸籠の中みたいな天気。早朝。コンビニへ出勤。身体を動かしている間は、嫌なことを考えない癖がつき始めていた。

夜勤の兄さんと他愛も無い話で盛り上がったたり、相方の沖縄君のずれたテンポに乗ろうとしてみたり、いつもの光景を享受する。

「なー、一番くじ、引いてくれる？」

客足が多くなり出した八時頃。おもむろに沖縄君がそう言った。

一番くじとは、今やコンビニではお馴染みのハズレの無いくじだ。今回はトイストーリーの景品で、ずっと前から女性社員さんがプレゼントでも貰う前みたく楽しみにしていたのをよく覚えている。

どうやら沖縄君も同様にトイストーリーのファンらしく、貯金箱を狙って二枚引いたらしい。現金換算で千円になる。

千円かけた結果、コップとタオル一つずつ。

残念だったなあ。と、思って内心ほくそ笑んでいた矢先に、先程の発言である。

正直、俺には彼のためにくじを引く理由が無いし、義理も無い。貯金箱が当たった場合、彼が手にした二つの景品の内、一つと交換

してくれるそうだが、限りなくハズレに近い景品と限りなく当たりに近い景品を交換しようなどは、どんな脳になっているのだから。

ただ、何故か俺はくじを肩代わりしてやる気になった。

今でも何故だかわからない。ただ、くじ引きに一喜一憂している彼の姿が滑稽だったというのと、コップのためなら五百円を出しても良いかもしれないと思ったこと、まだ仕事に余裕があったということ、色んな感情と条件がそろって、そんな気紛れが起こったのだろう。そう推測する。

くじを混ぜて、一枚引く…と、見せかけて、別の一枚を取ってめくって見る。

最下賞のストラップを取って一言。申し訳のなさそうな笑顔を作って。

「悪い、沖縄君」

落胆する沖縄君。貯金箱にどれだけ見せられているんだ。

ただ、落胆する彼の様子がこの世の終わりを迎えた様な酷さ。思わず笑ってしまった。

「落ち込むなって。ほれ」

めつくたくじを彼の眼前に突き出して見せる。
全く、作り笑顔を本物に変えるってどんなオーバーリアクションだ。

当たり。貯金箱。

一瞬、理解が追いつかず呆気にとられる沖縄君が、俺の笑い袋に追い討ちをする。もう勘弁してくれ。

その後は勿論、コップと貯金箱の交換会である。俺ってどれだけお人好しなんだろうとか呆れながら、でも、くじを引いた右手に残った感触の余韻に浸って、久々に梅雨明けしたような気分になった。

まさか、一発で、狙い済ましたかのように引き当てるとは思ってもみなかった。

「お前は選ばれた人間なんだ」

それは俺を構成する要素だし、父親から受け取った誇りだから、この先も消えることはないだろう。

だけど、こつも考えることはできないだろうか？

「俺は、選ぶ人間なんだ」

俺は、狙ったくじを選んで、見事に貯金箱を当てた。偶然、確率論の問題なのだが、自分には神の手が、選択者の手があるのだという確信に至るには充分なきっかけだった。

選ばれるのを待つよりも、俺自身が選ぶ方が確実だし、その方が格好良いじゃないか。

膨らませる風船だって選ぶことができる。何で膨らませることだってできる。ヘリウムでもぶち込んで、空高く飛んで行ったら最高の眺めだろう。

成層圏で破裂して墜落はゴメンだけど。

だから、俺は選んでやる。全てを選ぶ側の位置に立ってやる。絶対に、選択する側に立つんだ。ヘリウムで飛ばうが、いつかは破裂するなんて運命を捨てて、飛び続ける空を選んでやる。

いつしか、胸が膨らんでいた。

一段（前書き）

あるある。

一段

階段つて奴は自然に並んでいるように見えて、実は結構ずる賢い計算が仕込まれているのではなからうか。そういう悪意めいた善意が見えてならない。

特に、あの角度、ステップの高さ、幅、面積……きつと、この形へ到達するために、先人たちの試行錯誤が詰め込まれているのだらう。

時間にして、一段分の移動。

人ならば誰にでも、悩むべき局面が訪れることだらう。決断を迫られる時が来るだらう。大なり小なり、兎角この世は意思決定の連続である。

そして、そういう場面というものは大抵、刹那にも清浄にも満たない予期せぬ瞬間なのだ。

その瞬間に、俺は、踏み出せなかった。

もしもその時、俺が決起さえすれば……凡庸な日常へ深く潜ることができたならばきつと、人生でまたとない奇跡的な情景を目の当たりにできただらう。

それはきつと、これから先を、死に物狂いで求めてきた夢や未来を儚い物で終わらせるだけの価値がある神秘であるのだらう。人間の欲望の根幹、悪魔に魂を売る類の俗話が作られた理由にも直結するかもしれない。

とにかく、眼前に現れたそれは、それだけの価値がある物なのだ。

それを俺は、諦めた。

勇気がないと、臆病者だと罵ってくれるなら、それで構わない。

だが、そう言う貴方は踏み出せるのか。

自分が生まれたことを、生きてきたことを、これから生きること

をただ「儚いから」と言つて捨てられるのか。目の前の黄金に手を出して、そのまま金と一体化して満足なのか。

答えがイエスならば、俺は貴方を褒め称えよう。貴方は立派だ。自分の欲望に忠実な、人間賛歌の象徴だ。

答えがノーならば、貴方は俺と同じ臆病者だ。

しかし、恥じることはない。一を手に入れて全を捨てるほどの覚悟など、一介の人間がおいそれとできる所業ではない。だから貴方は、普通の臆病者なのだ。世の中にありふれた虚弱者なのだ。

人なんて生き物は、儚くても未来や夢にすがって生きていくしかない弱い存在。だけど、弱いからこそ目と鼻の先の栄光に尻尾を振る。そして、二度とは戻れない短い道を選んでしまふ。…後になつて後悔する暇もなく滅びる。

アドルフ・ヒトラー、煬帝、イワン四世、八百屋お七…

そうだ、心躍るものに踊らされて身を滅ぼした人間など、歴史の表舞台を流し見ただけで幾らでもないか。

過ちを省みないで何が人か。

俺たちは人だ。

臆病なんかじゃない。誘惑に勝つたんだ。

答えがノーならば、貴方は不動不屈の精神を持った勇者なのだ。これで良いんだ。

時間にして、一段分の移動。

際どいミニスカートの彼女は、俺の目の前から消えた。

一段（後書き）

あるあるあるある！わかるわかるわかるわかる！どうしてそこで黙って首を横に振るんだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1194m/>

【習作集】徒然日記と隅っこの落書き

2010年10月10日21時25分発行